「防災の教え　稲むらの火」

講談師　一龍斎貞花

東日本大震災復興未だし。そしてオリンピック、パラリンピックが開催されることから「安全・安心まちづくり」講演の依頼がふえています。昭和58年5月、日本海中部地震。大津波で１００名の死者。その中に、海岸に遠足に行った小学生13人も。学校で「稲むらの火」を習っていたらこの事故は防げたろうといわれた。

小泉八雲作「生ける神」を基に、教師中井常蔵氏が子供用に書き、戦前小学国語読本に採用され、震災後64年ぶりに教科書に復活。中井先生の許可を得、事実をつきまぜた講談「稲むらの火」お聴きください。

紀州有田郡広村（現広川町）に生まれ、本家の醤油屋を継いだ浜口梧陵（ごりょう）は、帰郷中の安政元年（１８５４年）11月5日夕方のこと、ゴオーというようなるような地鳴りがしたかと思うと、グラグラッと来た。「オッ、地震だ」グラグラゆったりとしたゆれが長く続いた。なんとマグニチュード8・4。これまで経験したことのない地震に「これは、只事ではないぞ」

家から飛び出すと、庭から下の村を見下した。村人たちは、地震が収まったので豊年を祝う祭りの支度を続けている。村から海へ目を向けた梧陵は、「アッ」いつも穏やかな湯浅湾の波が、沖へ沖へと勢いよく引いていき見る見る大洲ヶ浜の海岸には、広い砂浜や黒い岩底が現れてきた。「大変だ。津波がくるぞー」思わず大声で叫んだが、祭囃子にかき消され聞こえない。

「このままにしておいたら千三百人の命が、村もろともひとのみにやられてしまう。よしっ」

もう一刻も猶予できない。家に走り込み大きな松明（たいまつ）を持って飛び出すや、刈り取って積み上げてある稲の束に走り寄ると、

「勿体ないが、これで村中の命が救えるのだ」稲むらに火をつけた。忽ちパッと火の手が上がった。風にあおられ実った稲穂がパチパチと音を立てて燃え上がる。

夢中で自分の田のすべての稲むらに火をつけて廻る梧陵の顔を、燃え盛る炎が明々と照らしておりました。いつか陽は落ち暮れなずむ夜空に、稲むらの火が天を焦がした。ゴンゴン、ゴンゴン。闇を焦がす炎を見て山寺で早鐘を突き出した。「火事だ、庄屋さんの家だぞ」若者たちが急いで坂道を駈け出し、続いて老人も、女も子供も、駆け出してくる。

「何をしているんだ。みんな早く

上ってこんか」やっと20人程の若者が駆け上がってくるや、

「稲が燃えているぞ。早く消さなきゃ」「打ち捨てておけ。そんなことより村中の人に早くここへ来てもらうんだ」追々集ってきた人たちは、訳が分からず梧陵と燃え盛る稲むらとを見くらべた。

「見ろ、やって来たぞ」

梧陵の指さす方を見やると、遠く海の端に黒い一筋の線が、その線は見る見る太くいっぱいに広がると非常な速さで押し寄せてきた。

「津波だ」「津波だぞっ」

波が絶壁のように迫ったかと思うと、目の下は大海原と化し、白い泡を飛ばして荒れ狂ったか思うと、ゴーッと音を立てて一気に汐は引いていく。

「アッ、家が、家が流されていく」

波は村の上を荒れ狂い、二度、三度、海は進み、また退いた。

村人たちは、稲むらの火によって命を救われたのだと気がつくと、梧陵の前に跪いた。

「皆の命が助かって本当によかった」

広村は天正の災害で約四百戸を流され、宝永4年には家の大半を流され死者三百余人を出したが、この安政の津波では、125軒の家が流されたが、総人口1323人のうち36人がおぼれ死んだものの一人の怪我人も出なかった。

梧陵は、度重なる災害から村を守ろうと、3年10ヵ月をかけて高さ8m、長さ670m、大きな石を積み上げ、その上に土を盛った堤防は、昭和36年の第2室戸台風によって石積みが流されるまで百年間、荒波から守り続け、残っている堤防は国の史跡に指定され、現在の1億円近い費用は梧陵が私財を投げ出したのでございます。

その後梧陵は、逓信大臣、そして明治13年、初代和歌山県議会議長に就任し県政に尽力。明治18年アメリカ視察中、ニューヨークで66歳で死去。

梧陵の子孫は本家ヤマサ醤油の社長。曾孫が菊正宗の社長。菊正宗の社長は、祖々父の心を受け継いで防災に熱心で、神戸地震の時には、ホーム保安灯やカドニカ常備灯を各部屋に設置していて、夜明け前の地震にもすぐ対処できましたと強調されています。地震後保安灯が大きく売り上げを伸ばしたが、東日本地震は午後の地震で保安灯の売れ行きにあまり影響がなかったのではないかと思うが、防災講演の多いところから、保安灯そして火災報知器の設置を勧めている。火災報知器は、すべての家庭に設置するようにといわれていたが、一過性でこのところ全くといってよい程奨励されていない。新築住宅には設置されているとはいえ既存の住宅に完全設置を勧めていただきたいものです。

以前、鹿児島で電車の中に土砂が積もっていた。車掌さんが土砂崩れを察知しすぐに乗客を避難させ助かった。東日本地震の時、大川小学校は児童を30分も校庭に待機させ、迅速な対応をしなかったため多くの死者を出してしまった。危機管理、安全管理は、日頃からの対策がいかに大切であるかということです。■

浜口梧陵像（和歌山県広川町　稲むらの火広場）